峠

土田耕平

青空文庫

その時、太郎さんは七つ、妹の千代子さんは五つでありました。太郎さんはお父さんに背負はれ、千代子さんはお母さんに背負はれてゐました。

春三月とはいへ、峠の道は、まだきつい寒さでした。夜あけ前の四時ごろ、空にはお星さまが、きら〳〵と氷のやうにかゞやいてゐます。山はどちらを見ても、墨を塗つたやうに真黒で、灯のかげ一つ見えません。お家を出てから、もう一里あまり山の中へ入つて来たのであります。お父さんのさげてゐる提灯（ちやうちん）のあかりが、道ばたの枯草にうつるのを見ると、そこゝゝに雪のかたまりが凍りついてゐます。

千代子さんは、さつきから、

「さむいなあ〳〵。」と云つて、泣きじやくりしてゐましたが、その声がいつの間にか、「いたいなあ〳〵。」に変りました。太郎さんも千代子さんも、あつい毛の襟巻（えりまき）をまき、足には足袋を二つ重ねてその上に毛布と外套（ぐわいたう）をかけて、お父さんお母さんの背なかにしつかり負はれてゐるのですが、それほどにしても、山の寒さは身にしみとほるほどきついのであります。ことに足のさきは、ちぎれるやうに感じられます。

「お泣きでないよ。」

とお母さんが時々なだめるけれど、千代子さんはいつまでも同じやうに泣きつゞけてゐます。

太郎さんは、お父さんの背にぢつと首をもたれて、泣きたくなるのをこらへてゐました。お

家を出る時に太郎さんは、背負はれるのはいやだ、歩いてゆくと云つて剛情をはりましたが、お父さんがどうしてもおゆるしになりませんでした。太郎さんは、今そのことを思ひ出して、やつぱり背負うていたゞいてよかつた、と思ひました。

太郎さんは、毛布の中からのぞくやうにして、片方の高い山を見てゐました。山のすがたは、たゞ真黒で、木やら岩やら見わけもつきませんでしたが、そのいたゞきのところが少しばかり明るく見えます。その明るみがだん〳〵増してきて、ポツンと金色の点があらはれました。点がだん〳〵伸びて角の形になりました。

「お月さまだ」と太郎さんは云ひました。

「まあ、今ごろお月さまが出ましたわ。何といふ恐い色でせう。」とお母さんが云ひました。

「二十三夜さまかも知れないな。もうじきに夜あけだ。」

とこれはお父さんの声。

そして、お父さんとお母さんは、何やかやことばを交はしました。千代子さんは、いつか泣きやんで、やつぱりお月さまを見てゐるのでした。

「のんの様〳〵。」

と千代子さんは、云ひました。鎌形のお月さまは全く山をはなれて、うすいけれどもするどいそのお光が四人の姿を照らしました。

しばらくの間、みんな黙つてゐました。そのうちにお父さんが、「あゝ千代子は眠つたね。

太郎も一眠りしてはどうかな。」と云ひました。太郎さんは、目をつぶりました。すると、どこか遠くの方で、

　カラ〳〵〳〵、ガラ〳〵〳〵。

と氷の割れるやうな音がきこえます。

「あれは何？」

と太郎さんは、目をつぶつたまゝ云ひました。

「川の音だよ。」とお父さんが云ひました。カラ〳〵〳〵と、その音が近よつてくるやうに思はれましたが、やがて急に聞えなくなつてしまひました。太郎さんは眠つたのであります。

　目をさまして見ると、夜はすつかり明けはなれてゐました。空のお星さまは一つ残らず消えてしまひ、お月さまがたゞ白く形だけのこしてゐました。夜は見えなかつたのに、山のあちこちに、雪がまだらに模様を形づくつてゐて、枯れた木立や、赤さびた杉の木が目につきました。あたりは、しんとして、何のもの音もありません。

　太郎さんは、さつき眠る前に聞いた川の音を思ひ出して、

「川はどうしたの！」

と聞きますと、

「あれはもうずつと山のかげになつてしまつたのだよ。」

といふお父さんの返事でした。

「峯はまだ遠いの？」

「もうぢきだよ。あの山のかげ。」

とお父さんが指さす方を見ますと山の鼻がけはしく出張つて、道はそのかげにかくれてゐます。

お父さんの息が、真白く煙草のけむりかなどのやうに見えます。太郎さんは、毛布の中から顔を出しました。すると、太郎さんの息も、真白く鼻のさきにひろがつて見えます。外套や襟巻のまはりには、息が凍りついて、雪でも降つたやうでした。お母さんはお父さんと並んで歩いて居ましたが、その襟もとはやはり真白くなつてゐました。千代子さんは、毛布の中にすつかり顔をかくして眠つてゐます。

「あれもうあんなにお日さまがさしてきました。」

とお母さんが云ひました。見あげると、山の上の雪が、きら〳〵とかゞやいてゐます。お日さまの光は、見てゐるうちに、あちらの山こちらの山とひろがつて行きます。たうとう道の上までさして来ました。

山の鼻をまはると、道ばたに小さな家が一軒ありました。古びた縁がはに、お日さまの光が一ぱいにさして、雨戸はかたく閉められてあります。それが峠茶屋でした。冬のうちは里におりてしまつて誰も居ないのであります。

「さあ、こゝで一休みだ。」

とお父さんは、外套をぬいで、太郎さんを縁の上におろしました。

「あたいも下りる。」
とお母さんの背なかで、千代子さんの声がしました。
「おや、千代子はもうお目ざめだつたの。」
とお母さんは笑ひながら、千代子さんを縁の上におろしました。
太郎さんと千代子さんは、縁の上にならんで立ちました。今まで登つてきた道が、目の下の谷底に見えかくれして長くつゞいてゐます。
「お家はどつちだね。」
とお母さんが云ひましたが、千代子さんは、首をかしげて分らぬといふ顔つきをしてゐました。
太郎さんが、
「あつち。」
と遠い山のかげを指さしました。
「こゝからは道が平だから、太郎はお歩きよ。」
と、お父さんが包みの中から、小さな藁草履（わらざうり）を取り出しました。太郎さんはそれをはいて、縁からとびおりました。
「あたいも歩く。」
と千代子さんが云ひました。
「おまへは歩けまいが、まあ履いてごらん。」

とお父さんは、もう一足の草履を出しました。千代子さんは、それをお母さんに履かせていたゞきました。夜あけ前のあのきつい寒さは、すつかり忘れたやうになりました。お父さんもお母さんもニコ〳〵して楽しさうでありました。

「ずゐぶん寒かつたな。」

「えゝ。千代子が泣いた時には、わたしも泣きたいやうでした。」

こんなことを云ひながら、縁に腰かけて着物の襟をなほしたり帯をむすびなほしたりしました。

茶屋の前は、日あたりがよいので、土が乾いて暖かさうに見えます。太郎さんは、元気よく大股に、そこらを駈けまはりました。千代子さんも、太郎さんのあとについて、あぶなさうな足つきでとび歩いてゐましたが、やがて、道ばたへかゞんでしまひました。何かぢつと見てゐます。

「何をしてゐるのだらうね。」

とお母さんは、縁をはなれて、千代子さんのそばへ行きましたが、

「まあ、菫が咲いてゐますこと。」

と、驚き声に云ひました。

「ドレ〳〵。」

と、お父さんも立つて行きました。太郎さんも、道のむかうがはから駈けて来ました。

枯芝の中にたつた一つの菫が咲いてゐるのです。あたりの山々には、まだ雪が深く残つてゐますし、日かげには霜柱が一ぱいに立つてゐますのに、もう菫の花が咲きました。

「やつぱり春ですね。」

とお母さんが云ひました。そして、親子四人のものは、長い間その一つの菫をながめてゐました……。

太郎さんは、成人してからも、その菫のことをはつきり覚えてゐました。妹の千代子さんに話すと、

「わたしはどうしても思ひ出せなくてざんねんです。」

と云つて、その時の話をして下さいと太郎さんにたのむのでした。そして二人は、今は世にない父上母上を偲びながら、峠越しの話をするのでありました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第九巻」ほるぷ出版
　　1977（昭和52）年11月20日初刷発行
底本の親本：「鹿の眼」古今書院
　　1924（大正13）年10月
初出：「童話」コドモ社
　　1924（大正13）年4月
入力：川山隆
校正：noriko saito
2013年11月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

峠

土田耕平

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/